

機に攻撃されたりしてしまった。私は八月十二日まで大浦勤務でありました。

特別休暇をもらったが私は第二次だった。ところが第一次に帰った者は岩国で米軍機の爆撃を受けた。私たちは特攻をするため十二日博多集合、その間に沖繩へ索敵攻撃をした。

十四日に飛んだが、誰かが行かねばならないので、私も「胸が晴れた思いで死んでも良い」と思った。

その後、飛んだら九州の西海岸の灯火管制が無くなっておかしいと思った。敵もいなかった。それまでは敵がいつも何機かいて、こちらも何機かで撃ち合ったのだが。

朝鮮にいた者は八月二十四日、五日に釜山から下関へ渡らせた。終戦後は一週間残務整理をして、私物や書類の整理をした。我々は飛行服は持って、「無期休暇と無賃乗車券」をもらった。休暇は基地司令官の命令で、「若し連絡があれば集まれ」ということだった。当時は命令や、情報が錯綜していたと思う。

帰宅したら母は病弱で休んでいたが、「もう何処へ

も行くな」といわれたので、日本航空からの誘いを断わって、百姓をやったり親戚の織維会社へ二十年程勤めていた。その後独立したが、飛行機乗りの時、肋骨を折った所が、帰ってから化膿した。

先程申したとおり、甲種予科練十期の同期生の七割以上が戦死し、現在生存者二百名の中に私も入っていることを見れば、自分の幸せと、戦没者や御遺族のことを深く心に刻んだ毎日です。

## 海軍航空隊 軍隊当時の思い出

大阪府 中江 清則

―中江さんは、海軍へ志願されたというが、何か動機があったのですか、生まれは大正何年でしたか。

私は大正十四年二月四日生まれで、海軍を志願した動機は従兄との再会にあります。

従兄の板倉光馬氏は、昭和八年、海軍兵学校六十一期生として卒業して、大尉で潜水艦「イ号四十一」の

艦長として活躍していた頃だったと思います。

当時、私は鉄道省若松工場へ勤務していました。従兄は結婚をして呉市内に在住していました。昭和十八年頃だったと記憶しています。父宛に従兄の長女誕生の知らせがあつて、私が父のかわりにお祝いの品を持つて訪れた時でした。二人で祝杯をしながら世間話から海軍の話になって、従兄は

「君、海軍へ志願しないか、今の非常時に中江家から誰も兵隊に行っている人はいないだろう。」

といわれ、即答を避けて帰る列車の中で自分のこれから先をいろいろ考えました。

よし俺も男だ。長男で一人息子だが運命は自分では判らない。私は父にだまつて従兄の勧誘にのつてみようと覚悟して願書を出しました。

当時、私は鉄道に勤めながら小倉市立九州工学校の夜間部に通学していました。

願書を出して一週間ぐらいして、市役所から試験の通知があつて受験をしました。十日ぐらい過ぎたころ、市役所の兵事課から「合格したから出頭せよ」との通

知を受けたのが昭和十九年一月二十日頃だったと思います。

開封して見ますと、

「海軍整備兵に合格す、昭和十九年二月五日、佐世保市相ノ浦第二海兵团に入団せよ」

との文書でした。

兵事係は二月四日午前九時、門司港発相ノ浦行の志願兵列車に乗車するようにとのことでした。その日は私の満十九歳の誕生日でした。もうこうなると父に黙っているわけにはいかず、その夜従兄の光馬からの勧誘の話をして、この戦時下に私は

「徴兵検査（国家が国民『男性』に兵役の義務を課し強制的に徴集して、一定期間兵役に服させること）には甲種合格になることは間違いないと思つて志願しました。」

と、許しも得なかつたことを詫びました。父は体に気をつけて目的を達成して呉れの一言でした。

入隊の時の様子はどうでした。また海兵团入団後の教育訓練についてお話をして下さい。

入隊日の二月四日は前夜からの大雪でした。町内の婦人会の方々がプラスチックバンドで軍歌も高らかに電停まで見送って呉れたのが今でも目に浮かびます。列車は超満員で、相ノ浦駅に到着したのは、午後三時ごろだったと思います。

駅前で整列して海兵団に着いた時、自分もこれから海軍軍人としての教育を受けるのだと緊張しました。私は整備科第四十七分隊第十一教班に配属になりました。分隊長の訓示があつた後各班に戻つて教班長から諸注意と、分隊長係、分隊士係、先任教員係の発表があり、私は先任教員係に抜擢されました。この役は先任教員の身の廻りをする事です。洗面準備から食事の用意、作業衣の洗濯からハンモックのあげさげまで、自分のものと二人分で大変でした。新兵教育も三ヵ月で終わりましたが、鍛え方は随分酷かつたものです。

しかし一等兵に進級して右腕に階級章がついたのは嬉しいものです。その日転勤先の発表があつて、私は鹿児島県の鹿ノ屋第二航空隊第二十八期生普通科射爆

練習生として第三十二分隊第四班に入り、射撃爆撃の教育を受けることになりました。

飛行機に搭載している機銃の分解組立と、爆弾および信管の種類と火薬についての勉強並びに実射訓練です。七・七ミリの旋回機銃から三十ミリ機銃で、機銃の分解組立てをみっちりと学んで、目かくしをして分解組立てが全員できるまで外出もできないのです。練習生とはこんなにも厳しいものかと思いました。毎日が勉強と鍛練によつて、心身や技能をきたえる道場だと思いました。酷いと思つた新兵教育とは雲泥の差があつて、居住区（兵舎）内でも三步以上あるく時は駆足で行かねば何が飛んで来るかわからない。とにかく厳格です。これに耐えきらずに脱走した者も何人かいた。

上等兵以上は雨具をもつて整列の号令が出ると、また逃亡かと思議におもつた。これぐらいな試練を乗り越えられなくてよくも志願して来たものだと、たとえ叩き殺されたにしても本望ではないかと私は思つた。軍隊とは甘い考えは通用しない規律正しく厳しい

ところでありました。一人の失敗が全員制裁を受ける原因となるのです。集団生活をしていれば誰かが失敗するものです。

ある日、総員整列でバッテリー（軍人精神注入棒）で尻を三回殴られたことがありました。海軍に入ってから始めてのバッテリーであり、その時は揮一杖でした。整列した順に殴られるのだが、自分のところまで来る間は気持ちが悪いが、いよいよ自分だ。駈足で教官の前に行き敬礼をして、上半身を四十五度に傾けて尻を出す。最初の一発で尻に火が着いたような痛さだった。三発殴られて敬礼して「有難うございました」と礼を言って席に帰る。全員終ってひと文句いわれて解散後すぐ寝床に入ったが痛くて寝つかれなかった。

練習生の生活も九月半ばに終って卒業証明の左腕マーク（一重桜、右腕は階級章）を軍服の袖に付けることが出来ました。

一卒業してからは何処へ勤務したのですか。

移転発表があつて、私は上海海軍航空隊第九分隊（兵器整備）に配転になりました。だが輸送船が無くて佐

世保の第一海兵団に仮入団して待機していました。同期生約三十名で毎日防空壕掘りの作業でした。約一ヵ月して陸軍の御用船が四隻、

「船団で門司港から出発するから便乗せよ」

「上海航空隊へ行く者は直ちに一種軍装に着替えて本部前に整列せよ」

との号令で、我々三十名は作業服を正服に着替えて、本部前の広場に整列しました。司令（少将）の訓辞が終って、司令は自ら一人ひとりに別れの杯をして団門まで軍楽隊の演奏で見送ってくれました。

一昭和十九年も半ばになると、敵の潜水艦や空襲の危険があつたのでしようか。

次の日の早朝、門司港駅に到着して直ちに点呼して乗船しました。その船には陸軍の兵隊が二千名ほど乗っていました。出発の合図で船は岸壁を離れて玄界灘へと向かう、これが九州の見おさめだとデッキに上がって、小倉や若松をしばらく眺めていました。しばらくして海軍さんからデッキで見張りにつくようにとの連絡で、私は船首に行つて任務に着きました。

船団の護衛には駆逐艦が三隻来て、前後左右走り廻っていた。船酔いする者が多かったので、私は対潜・対空の見張りをしていました。しかし、この船団は後で東シナ海でやられました。

乗船して三日ぐらいたった頃、青々とした海原に黄色い水境が見えた。「アッこれが揚子江だ」それにしても大きな河だなあと見とれていました。

夕暮れに呉淞港に着いて、直ちに上陸して休憩していると、航空隊から迎えのトラックが二台来ました。航空隊に着いたのが十時頃だった。

― 配属された上海航空隊ではどのようなことをされたのですか、当時はもう比島に米軍は上陸し、台湾沖海戦も結局は敗北しましたが。

私達同期生三十名は、第九分隊員となつて兵器整備に精励しました。当時その航空隊は練習航空隊で、予科練の赤トンボ（練習機）が発着訓練をしていました。戦争も負け戦で台湾海上から後退して沖縄戦となり、我々も本土決戦を余儀なくされていた。当航空隊も実戦に参加出来る飛行機は無く、内地で編成された特

攻機が編隊でくるようになりました。

ある日夕方、約二十機ぐらゐの特攻機が到着して、明早朝、沖縄海戦に突入すること、戦闘機を始め艦爆が機銃弾や爆弾を満載して威勢よく夜明けを待っていた。早朝、拡声器は

「特別攻撃機出発、総員見送りの位置につけ」

との号令で飛行場まで駆足で行きました。特攻隊員と別れの握手をして励ましている時に「敵機来襲、総員退避せよ」との号令で上空を見ると、グラマンとP51四機が攻撃態勢に入っているが見えた。

搭乗していた特攻隊員も飛び降りて、全員必死で退避した。航空隊周囲の高射砲陣地からの砲撃もなかなかあたらぬ。敵機は思うように暴れまわっていたが、しばらくして飛行場で黒煙が見えてパチパチとはじける音がきこえた。

その時私は、あの音は機銃弾の爆発音だと思った。これでは近寄ることも出来ない。結局全機の鎮火を待つ以外に手の出しようもない、残念であるが仕方がない。結局この空襲で、特攻機三十機が出発を前にして

全滅してしまつたのです。

日増しに戦況は不利になって来て、不安は増すばかりだ。飛行機は無く米軍の逆上陸に備えなければならぬので、私達は毎日タコ壺掘りに精を出した。もし敵が上陸して来たら、先づM4戦車が来るだろうと予想してのことらしい。戦車が来る前に樺爆雷を持ってタコ壺に入って様子を見る。もし戦車が来るとキヤタピラを切断するために投げつけるのです。今思えば幼稚な作戦だが、その当時は一生懸命だったので。相手は空ではなく、対戦車攻撃の教育をされたわけですから。

—終戦は何時頃、何処で知つたのですか。

私は航空隊では爆撃射撃が専門なので爆薬等の分散の長をやっていました。八月の十日ごろ耳新しいニュースとして、内地に新型爆弾が投下されて、多くの死人が出たらしいとのことだが本当のことはわからなかつた。恐らく敵さんの悪言伝ぐらいに思っていると、十五日正午に重大放送があるから総員本部前に集合せよとの知らせを受けて、分隊全員整列して行きました

ら間もなく放送が始まつたが良く聞きとれなかつた。

あとで司令から

「この戦争は終つた。日本は戦争に負けた。だが日本へ復員するまでは秩序ある行動をすること、また階級章はそのままつけて帰ること」と言われた。

我々日本人は上海の入り口にある昭和島に集結して、祖国日本へ帰る日を約七ヵ月待っていました。三月四日に飯田棧橋からリバティ（米輸送船）に乗船して七日博多港に上陸しました。

復員援護局から切符や現金五百円と食料を貰つて帰つたのです。この日が、二年余りの海軍航空隊勤務の最後の日となりました。散つていった仲間、特攻隊のことなど、今でも夢に見ることがあります。